風

神戸大学 広報誌［kaze］
Kobe University Public Relations Magazine
Jul.2018 Vol.11 http://www.kobe-u.ac.jp

特集1　神戸大学 × 白鶴酒造株式会社による共同開発、純米酒「神のまにまに」を発売

社会を見据える神大酒学

特集2　神大研究ズームアップ　河川監視カメラの動画から流速、流量を計測

画像解析ソフトで世界の河川防災に貢献

特集1 神戸大学 × 白鶴酒造株式会社による共同開発、純米酒「神のまにまに」を発売

社会を見据える神大酒学

神戸大学は、地元「神戸」の発展に貢献する取り組みを、さまざまな形で行っている。その一環として昨年、神戸市東灘区の老舗企業・白鶴酒造株式会社と共同で日本酒の商品開発を行い、10月にオリジナル純米酒「神のまにまに」を発売した。また、今秋からは日本酒を学問的に扱う講座「日本酒学入門」も開講する。伝統産業である「灘の酒」に新たな注目を集め、神戸の魅力発信につなげる取り組みを紹介する。

山口誓子（やまぐちせいし）と神戸大学

神戸大学名誉博士第１号は、俳人の山口誓子（1901-1994年）である。誓子は、俳句雑誌『ホトトギス』で活躍し、水原秋桜子、高野素十、阿波野青畝とともに「四Ｓ」と称揚され、新興俳句運動では先導的役割を果たし、戦後は1948年に俳句雑誌『天狼（てんろう）』を創刊主宰して俳句の「根源」を探求した。代表句に「虹の環を以て地上のものかこむ」「夕焼けて西の十萬億土透く」「海に出て木枯帰るところなし」などがある。

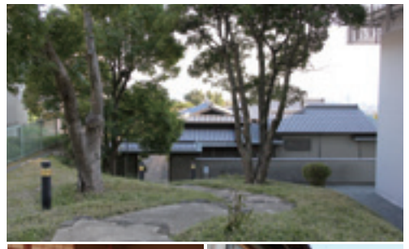
誓子は神戸大学の卒業生ではないが、戦前から本学との関係が深かった。例えば、旧制神戸商業大学時代の同窓会誌『凌霜（りょうそう）』の誌上では、1940年から44年戦時休刊までの４年間、誓子が「凌霜俳句」第２代選者を務めて活躍する。また、誓子の妻波津女（はつじょ）の実弟２名と義弟（妹の夫）は、いずれも本学の卒業生である。しかし、誓子と本学との直接的な関係は、1985年に死去した波津女の遺産を子どものいない誓子が本学に寄附したことに始まる。本学を優れた日本文学研究の拠点だと期待した誓子は、「神戸大学の学術研究の助成のみでなく、広く国文学の振興に役立てる」ことを寄附の趣旨とした。本学は「山口誓子学術振興基金」を創設するとともに、1988年本学最初の名誉博士の称号を授与して誓子の功績を称えた。

1994年誓子が92歳で死去すると、遺言書に基づき全遺産が本学に寄附され、それを元に「山口誓子記念館」と「誓子・波津女俳句俳諧文庫」が設置された。前者は、阪神・淡路大震災で倒壊した誓子の自宅（西宮市苦楽園）の一部をほぼ忠実に復元した木造平屋建て（設計は工学部建設学科教授（当時）足立裕司）であり、火・木曜日に一般公開中。後者は、遺品、遺稿、旧蔵書などを保存するとともに、『天狼』などの俳句俳諧関係図書を月・火・木曜日に一般公開し、山口誓子常設展も併設する。どなたでも気軽にお立ち寄りいただきたい。

（大学文書史料室 室長補佐 野邑 理栄子）

神戸大学名誉博士第1号
（新比古は誓子の本名）

山口 誓子（1985年）



山口誓子記念館

山口誓子常設展　開催中
「誓子と海 ―神戸開港150年によせて―」
百年記念館展示ホール　平成30年9月下旬まで

■Contents

[特集1] 社会を見据える神大酒学 ―― 03
[特集2 神大研究ズームアップ] 画像解析ソフトで世界の河川防災に貢献 ―― 08
[神大生の挑戦] ボーイスカウトの最高位「富士スカウト章」を受章 ―― 12
[KOBE教育] 世界で活躍するための数理・データサイエンスを学ぶ ―― 14
[キラリ神大 OG・OB] 日本の魅力を新しい手法で海外へ発信 ―― 16
[神大発地球] 社会課題の解決にピンポイントで取り組み志高いリーダーを育成する！ ―― 18
[こんにちは！留学生です] ―― 20
[国際ニュース] ／[留学だより] ―― 21
[神戸大学基金だより] ―― 22
[Mini News] ―― 23

表紙写真：食資源教育研究センター（加西市）

40haの敷地には、水田、畑地、果樹園、採草地、放牧地などがあり、これらのフィールドは研究教育に大いに活用されるとともに、神戸大学ブランドの農産物を生み出す生産現場でもあります。　カメラ：大亀 京助

Special Topic

日本酒で神戸の魅力を発信！

HAKUTSURU SAKE × Kobe University

白鶴酒造の研究開発部門と神戸大学農学研究科附属食資源教育研究センター、そして農学部の学生らも参画したこの取り組みの狙いは「日本酒を通じて神戸をアピールする」こと。老舗の醸造技術と神戸大学の研究成果、学生たちによる商品企画・販売企画のコラボレーションの行方は…。

灘の老舗との交流から日本酒の共同開発へ

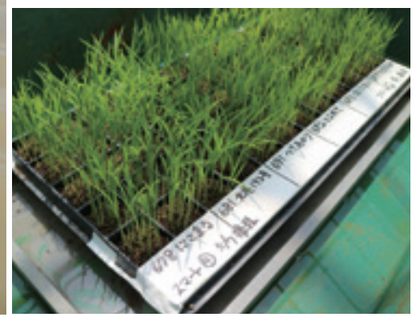
「『灘』は日本一の酒どころ。そこにあらためて目を向け、神戸の伝統産業である日本酒の魅力を通じて神戸をアピールしたいと考えたことが、今回の取り組みの出発点でした」。そう話す山崎将紀准教授が、白鶴酒造との共同開発に動き始めたのは3年前。同社には神戸大学の卒業生が何人も勤めており、農学研究科とも継続的に交流がある。「兵庫県は日本酒の生産量が日本一ですが、知名度も日本一とは限りません。そんな現状を変えるために、日本酒に対する若い世代の興味を喚起したいと思ったことも動機の一つです」。

山崎准教授は農学研究科附属食資源教育研究センター（加西市）で、イネを使って植物遺伝学や植物育種学の研究を行っている。実験用の水田に、コシヒカリにさまざまな品種を交配した5千系統・5万個体ものイネを植え、ICTで管理。新系統を作って遺伝解析を行い、膨大なDNAデータを蓄積。それを国や都道府県の農業試験場に提供したり、保存した種を分譲したりしながら、日本の農業に貢献している。白鶴酒造との酒造りには、原料米として同センターで栽培した品種「きぬむすめ」を提供した。

食用の米で酒造り？淡麗辛口の新酒が誕生

食資源教育研究センターは、総面積40ヘクタールの大規模な実験農場で、神戸大学の学生に限らず、他大学にも農牧場実習の場を提供している。米、野菜、果樹のほか畜産もカバーし、肥育した但馬牛を「神戸大学ビーフ」の商標で百貨店などに出荷している。

その農場で栽培される「きぬむすめ」は、暑さに強く、地球温暖化の影響を受けにくい高収量品種だが、食用の米であって、酒造りに用いられる酒米ではない。「それでも、きっと酒造りに使えるという期待を込めて、白鶴さんに提供しました」と山崎准教授。日本酒造りには麹作りに使う麹米と、酵母の栄養になる掛米が使われる。初の共同開発では、麹米には白鶴酒造が開発した酒米品種「白鶴錦」を使用し、掛米に「きぬむすめ」を使用することになった。



白鶴 × 神戸大学

白鶴純米酒
『神のまにまに（720mℓ）』1,404円(税込)

ところが、「きぬむすめ」は予想以上に粘りが強かった。「白鶴酒造の研究室の明石室長からは、醸造設備に負担がかかるほどの粘りが出て、大変だったとお聞きしました」と山崎准教授。それでも、270年超の伝統を誇る白鶴酒造の技術で課題は克服された。

こうして2品種の米から作られた純米酒は、淡麗な酒質ながら奥行きのあるしっかりした味わいを楽しめる辛口の仕上がりで、山崎准教授は「チーズケーキなどの甘いものにも合う」と話す。

農学研究科 附属食資源教育研究センター 准教授

山崎 将紀 *YAMASAKI Masanori*

1973年福岡県生まれ。1996年九州大学農学部卒業。1998年九州大学大学院農学研究科修士課程修了。2001年九州大学大学院生物資源環境科学研究科博士後期課程修了。博士（農学）。日本学術振興会特別研究員、海外特別研究員を経て、2006年神戸大学農学部附属食資源教育研究センター助手。2012年より現職。専門は植物遺伝育種学。

研究室HP：http://www2.kobe-u.ac.jp/~yamamasa/index.html

学生たちの思いが詰まった商品名とラベル

この純米酒は「神のまにまに」と名付けられた。命名したのは、神戸大学農学部の学生や大学院生たち。仕込み過程を見学した上で、「灘の酒」「神戸の魅力発信」「若者への日本酒アピール」といった今回のコンセプトに合う商品名とラベルデザインを考案した。

商品名にはもちろん、神戸大学にちなんで「神」という漢字を入れたいという思いが全員にあった。その上で、学問の神様・菅原道真が詠んだ百人一首の一句「このたびは幣（ぬさ）も取りあへず　手向山（たむけやま）紅葉の錦　神のまにまに」から命名。「紅葉を御心のままにお受け取りください」という歌の心に、「この日本酒にこめた私たちの情熱や思いも一緒に受け取って欲しい」との思いを重ねた。ラベルには神戸大学のシンボルともいえる歴史ある校舎「六甲台本館」をデザインし、女性や若い人でも手に取りやすいよう落ち着いた赤色を採用。そこに商品名を横書きで入れた仕上がりに、白鶴酒造サイドから驚きと賞賛が送られたそうだ。

共同開発は今後も継続 2年目の掛米は「にこまる」

純米酒「神のまにまに」は2017年10月1日、限定3千本が神戸大学生協、白鶴酒造資料館、白鶴御影MUSEと「いい白鶴ネットショップ」で発売された。それに先立つ試飲会や、白鶴酒造資料館で開かれた酒蔵開放イベントでは、「さっぱりしていて飲みやすい」「食事に合う」など好評をもって迎えられた。商品開発に携わった学生たちはイベントスタッフとして活躍する一方、Facebookでも PR・販促活動を展開している。神戸大学でも大学近隣（JR六甲道駅周辺）の居酒屋などに働きかけ、「神のまにまに」を提供する店を開発しているそうだ。

山崎准教授は2年目の仕込みに際して、「にこまる」という品種を提供した。やはり食用米で、掛米に使われる。「今年は事前の粘性チェックを経て決めました。『にこまる』は『きぬむすめ』を片親に持つ品種なので、味や成分は1年目とそれほど変わらないはずです」。

2年目の課題は販売促進。「神のまにまに」の1年目の売れ行きは概ね好調だが、年末年始の販売がいまひとつだったという。「学生が帰省みやげに使ってくれるよう、生協さんと協力して取り組みたい。また、OB・OGの皆さんがかなり買ってくださるので、秋のホームカミングデイでアピールします」と山崎准教授。

白鶴酒造も神戸大学との共同事業を継続する考えだが、引き続き販売実績が伴う取り組みにしていかねばならない。この取り組みと並行して準備が進められた「日本酒学入門」（7ページ参照）の開講によって、日本酒に対する学生の関心が高まることが期待される。

「神のまにまに facebook」https://www.facebook.com/kaminomanimani.kobeuniv/

Project Member

地域の方に商品をアピールして神戸の魅力発信につなげたい

石崎 初音 *ISHIZAKI Hatsune*
農学部 資源生命科学科 4年

これまで「神のまにまに」の広報代表を務めていた、藤田このむさんが大学卒業するのを機に、この4月から業務を引き継ぐことになりました。もっと多くの方に知っていただくためSNSでの情報発信や卒業式や入学式でのブース販売、近畿圏の大学が集う日本酒のイベントなどでPR活動を行っています。

先日、地域の方に、神のまにまにを飲んでいただく機会に恵まれました。神戸大近くの企業の社長がお酒を気に入ってくださり、その方が主催されている地域交流会の場で、PRイベントを行ったんです。山崎先生にお酒についての講演をしていただき、懇親会で実際に神のまにまにを飲んでもらって、地元の方に作っていただいた料理と合う飲み合わせをアンケートしました。すると、驚くことに一番人気だったのは、“冷や”と酒粕を使ったチーズケーキの組み合わせ。私たちにも新たな発見でした。今、神のまにまにの酒粕を使ってチーズケーキの開発もできればいいなと考えています。

地域交流会にて

次回は8月に地域イベントを開催する予定です。神戸大がある灘は酒どころとして有名なので、神戸の魅力の発信につなげるためにも、ぜひ続けていきたいです。

Topics

若者に日本酒の魅力を発信 2018年「日本酒学入門」開講！

灘の酒造組合と協働！日本酒を多角的に学ぶ

神戸大学では、2018年度から神戸市の灘五郷酒造組合と連携して、「日本酒学入門」を開講。神戸の地域・文化を知る科目の一つとして、全学共通教育授業科目の総合科目Ⅰとしてスタートする。「酒づくりはもちろん、日本酒の歴史から、酒どころの灘の地理的な成り立ち、酒税や経営について、海外への販売まで多角的・総合的に学ぶことができる」そう話すのは、白鶴酒造株式会社 研究室室長の明石貴裕氏。

画像提供：灘五郷酒造組合

灘五郷酒造組合
〒658-0046 兵庫県神戸市東灘区御影本町5丁目10番11号　TEL: 078-841-1101
・http://www.nadagogo.ne.jp/　・info@nadagogo.ne.jp

日本酒学入門の受講生から希望者を募り、酒蔵見学も検討する

「大勢の学生に日本酒について知ってもらうため、全学部の学生が対象。一般教養科目としてさまざまな切り口から広く日本酒を学んでいただく。興味のある分野を入口に日本酒にも興味を持ってほしい」と思いを語った。講義はオムニバス形式で、同社が加盟する灘五郷酒造組合を中心に酒造メーカーや日本酒造組合中央会などから講師を招く予定だ。

日本一の酒どころ灘から若者の日本酒需要を拡大

開講に至った経緯は、昨年の夏まで遡る。白鶴酒造株式会社専務取締役の田中準浩氏から本学の藤田誠一理事（教育担当）に打診があった後、明石氏が大学教育推進機構の米谷淳教授と打ち合わせを進めた。「酒どころである灘にあり、ぜひ、親交の深い神戸大学で日本酒に関する講義を行いたいと相談した。地場産業の日本酒を学ぶことは学生が神戸のことを知る良い機会だと、賛同していただけた」。

「日本酒は敷居が高いお酒だと思っている若者も多いが、主食のお米を使った日本人にとって身近なお酒だということを講義で伝えたい。知識があると日本酒への印象もずいぶんと変わると思う。20歳を迎えた時に知識を持って飲んでもらえたら」と若者への日本酒需要の拡大も見据えている。さらに「留学生にも日本文化の一つとして魅力を伝えていきたい」と明石氏は語る。秋の開講に向けて期待は高まるばかりだ。

灘五郷酒造組合提供オムニバス講義「日本酒学入門」　ピックアップ講義

■**日本酒の歴史、文化（目的：国酒の再確認）**
日本酒の発祥、歴史を理解するとともに、日本酒が持つ様々な文化的側面（日本酒にまつわる儀式、しきたりなど）を知ることで、「国酒」の意義を再確認する。

■**灘の風土と日本酒造り（目的：神戸・灘と日本酒の理解）**
灘が日本一の酒どころとなった経緯を地理的特徴や歴史的背景を通じて知る。灘の酒造りを支える活動（灘五郷酒造組合、水の保存、酒米など）を通じ、地域の特性を知る。

■**海外への日本酒情報発信（目的：海外での日本酒の動向・情報発信を知る）**
海外での日本酒の変遷、動向を知る。近年盛んになっている日本酒の輸出や日本文化の一つとしての日本酒の海外での特性を学ぶ。日本酒を通じた情報発信を知る。他

白鶴酒造株式会社 研究室 室長
明石 貴裕 *AKASHI Takahiro*

画像解析ソフトで世界の河川防災に貢献

河川監視カメラの動画から流速、流量を計測

オーストラリアで行われた流量観測ワークショップ。「KU-STIV」やドローンを活用する計測の実践

近年、全国で豪雨災害が多発している。２０１５年９月の関東・東北豪雨で鬼怒川の堤防が決壊し、洪水による被害が拡大したことは記憶に新しい。こうした災害を防ぐには、増水しても安全に水を流せる川を整備しておく必要がある。そのためには、降雨量が最大の場合に川に流れ出す水の量を把握することが欠かせないが、豪雨のさなかに川の流量を計測する作業には困難と危険が伴う。

そこで、河川を撮影した映像から流量を割り出す手法を確立したのが、大学院工学研究科の藤田一郎教授。独自開発した画像解析ソフトが国土交通省の河川事務所などで利用され、オーストラリア・クイーンズランド州政府に導入されるなど、国際的にも高い評価を得ている。画像解析技術によって的確な河川計画の策定と市民の安全に貢献する藤田教授にお話を伺った。

増水した川の流量をどう測る？

――豪雨災害が増えています。

河川工学の視点から見ても、大規模な災害が増えていると感じます。水防法も毎年のように改正されており、昨年６月には国管理河川だけでなく地域の中小河川でも避難計画等の策定が義務化されるなど、法律レベルでも対策の見直しが進んでいます。

対策を立てる上で重要なことは、雨が降ったときに、どれくらいの水が川に流れ出てくるか、その量を計測し、把握することです。降水量については高精度なデータが得られるようになりましたが、川の流量（ある地点を1秒ごとに流れる水の量）を正確に把握することは難しいんです。

――流量の計測はどのように？

日本では昔から「浮子法」という方法を用いてきました。これは、橋の上から複数の「浮き」を流し、川岸に一定の間隔で人を配置して浮きの通過時間を計り、川の表面流速を求める方法で、川底の形状や水位と掛け合わせて流量を計算します。手堅い方法ですが、計測する場所によっては、浮きが渦に巻かれたりしてうまく流れず、正確に計測できない場合があります。また、川のピーク流量（増水時の流量）を計測するには、豪雨の最中に浮きを流さなければならず、作業が困難でデータが取れないこともありますし、そもそも危険です。しかし、ピーク流量のデータなしに有効な河川計画は立てられないので、この点が今、問題になっているのです。

河川監視カメラの映像を活用

――そこで、映像に着目された。

全国各地に河川監視カメラが設置されています。その映像を解析して計測する方法を、20年以上前から提唱してきました。基本的な考え方は、川の表面に生じる波紋（水面の凹凸）を画面上でとらえ、その動きを追うことで移動距離と時間を計り、流速を求めるというシンプルなもので、浮子法と同じです。

ソフト化して市販したのは、私が開

interviewee 藤田 一郎 *FUJITA Ichiro*
大学院 工学研究科 市民工学専攻 教授
1954年山口県生まれ。1977年神戸大学工学部卒業。1979年神戸大学大学院工学研究科土木工学専攻修了。1979年神戸大学工学部助手、1982年岐阜大学工業短期大学部講師、1991年岐阜大学工学部助教授、1999年神戸大学都市安全研究センター助教授、2003年神戸大学工学部教授を経て、2007年より現職、（1995～1996年米国アイオワ大学水理研究所で研究）専門は河川工学ほか。

河川の流量測定システム「*KU-STIV*」を開発

発した「ＬＳＰＩＶ」と「ＳＴＩＶ」という２つの画像解析手法のうち、「ＳＴＩＶ」の方です。注目されたきっかけは、２０１２年の九州北部豪雨のとき、九州地方整備局から「ピーク流量のデータが取れなかったので、監視カメラの映像から割り出せないか」と相談を受けたことです。

藤田教授が開発した「KU-STIV」の操作画面。河川の映像に基準となる検査線を配置し（画面左上）、波紋や浮遊物が通過した時間から流速を求め、その分布を分析して間接的に流量を推定する。川岸から（横から）撮影した映像を、真上から見た映像に幾何補正し（画面右上）、1つ1つは短時間で消滅する波紋の軌跡を多数積み重ねた時空間画像（Space-Time Image）を解析することで流速（Velocity）が得られる。

画像解析による計測の有効性については、それ以前から各所で説明してきましたが、国土交通省やＩＣＨＡＲＭ（水災害・リスクマネジメント国際センター）で高度流量観測について話し合ううちに、ＳＴＩＶを「誰もが使えるようソフト化するべきだ」というお声を頂くようになり、２０１４年に「ＫＵ-ＳＴＩＶ」という商品名でリリース、翌年には英語版の提供も開始しました

――設置済みの監視カメラからデータも取れれば、自治体にとってメリットは大きい。

ただ、兵庫県と一緒に検証した際には、課題も明らかになりました。夜間の映像は真っ暗で、水面が映らないのです。洪水は夜間にピークを迎えることが多いので、夜の映像は是非とも欲しい。そこでカメラを探し、遠赤外線カメラを使えば、夜でも昼間のような映像を撮れることがわかりました。コストが高いのが難点ですが、国の方でも、夜間撮影ができる安価な監視カメラの製造をコンペ形式でメーカーに呼びかけています。

――国も画像解析の有効性を認識した？

ようやく、ですね。水文観測業務規程においても、浮子法しか認められなかった流量観測に、映像情報の使用が認められ、オフィシャルに使える気運になりました。「ＫＵ-ＳＴＩＶ」も既に国交省の河川事務所や河川コンサルタントに利用されています。今後は従来の手法と同等以上の精度管理に耐えるものに高めていくことが課題です。

危険を次々に「見える化」

――ドローンも活用されている。

監視カメラでは川の流域の１点しか観測できませんが、ドローンを使えばいろいろな観測ポイントをとることができるので、危険な場所や、緊急時でも撮影できます。流量だけでなく、川のどこで流れが速くなっているか、カーブのどこで水がぶつかっているかといった観点も重要ですので、ドローンによる撮影は有効です。また、河川計画を策定する上でシミュレーションモデルを作成しますが、実際の計測データと比較しないと検証できない部分があります。ドローンで実測データを提供すれば、シミュレーションモデルの改良に役立つでしょう。

――リアルタイムの計測は可能？

既に完成しています。川岸にカメラと、ＳＴＩＶを入れたマイクロサーバーを設置し、設定した時間ごとにソフトが起動して映像を撮影し、自動解析して研究室にデータを送信するしくみです。解析に必要な映像は10～15秒ほど。それを撮影して、解析に要する時間は1～2分。これを10分間隔で繰り返せば、ほぼリアルタイムと言えるでしょう。データに基づくモニタリングができるこのシステムについては、昨年マレーシアの国際水理学会で発表しました。すごく反響がありましたね。

ニュージーランド，クイーンズタウンの空港で

海外でユーザーが増加中

――ソフトの海外への供給は？

私はＷＭＯ（世界気象機関）で、流量観測に関するレクチャーシリーズの講師を務めており、いろいろな国を回っています。２０１６年にニュージーランドとオーストラリアで講習会を開いた際、クイーンズランド州政府の技術者であるランドール・マーク氏にお会いして、私のソフトを紹介しました。彼はとても気に入ってくれて、翌年には同州政府が「ＫＵ-ＳＴＩＶ」を導入しました。

――２０１０年末に大洪水に見舞われた州ですね。

それもあって、彼らは流量観測を高い精度で行おうとしています。ＡＤＣＰという、水中の流速を詳細に測れる機器を使っていますが、ボートに乗って使用するため、水面から60センチの深さまでは計測できません。そこで、表面流速がわかる「ＫＵ-ＳＴＩＶ」と連携させる試みを進めています。また、オーストラリアは大陸だけあって、流量観測のために数百キロも移動しなければなりません。その意味でも、カメラを設置しておけば計測できる点が評価されており、タスマニア州も導入を検討しています。

そのほか、カナダ、イギリス、韓国、ギリシャなど、海外の研究者から多数問い合わせがあり、1年間無料のアカデミック版を送っています。また、イギリスのソフトウェア会社から「代理店になりたい」という打診もありました。

――国際的な注目の的ですね。もう一つの画像解析手法「ＬＳＰＩＶ」については？

開発したのはＬＳＰＩＶの方が先で、これを流量観測に特化させたものがＳＴＩＶです。ＬＳＰＩＶは、１９９５年から1年ほどアイオワ大学の水理研究所にいたときに、「自由にお使いください」と提供してきたんです。それをフランスの研究者達がフリーソフトとして提供し始めたので、国際的にはＬＳＰＩＶの方が普及しており、ＵＳＧＳ（アメリカ地質調査所）を中心に世界標準にしようという動きもあるようです。光栄ですね。

実は、クイーンズランド州が画像解析ソフトを選ぶ際、対抗馬になったのがＬＳＰＩＶだったんです。最終的にＳＴＩＶが採用されましたが、双方の生みの親としては複雑な気持ちでしたね（笑）。

SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力）のガーナプロジェクトに基づき受け入れた JICA（国際協力機構）研修生に「KU-STIV」の技術移転を進めている

オーストラリア・クイーンズランド州の州都ブリスベンで行われたSTIVトレーニング

神大生の挑戦

ボーイスカウトの最高位「富士スカウト章」を受章

国際人間科学部 発達コミュニティ学科2年
辰巳 貴弘
TATSUMI Takahiro

今回はボーイスカウトの「富士スカウト章」を受章した国際人間科学部2年の辰巳貴弘さんを取材しました。スカウトの活動や大学でのキャンパスライフ、附属学校時代のお話などをお聞きします。

――今回受章された「富士スカウト章」について教えてください。

一般的にボーイスカウトといわれていますが、ボーイスカウトは5つの段階に分けられていて、小学1年生から2年生の「ビーバースカウト」、小学3年生から5年生の「カブスカウト」、小学6年生から中学3年生の「ボーイスカウト」、高校生以上の「ベンチャースカウト」、18歳から25歳までの「ローバースカウト」があります。

今回受章した「富士スカウト章」は、ベンチャースカウトの中で最高位の章です。ローバースカウトは後輩を指導する立場になるので、この章が実際に活動しているボーイスカウト全年代での最高の到達点になります。

この章を受章するには、前段階にあたる「隼スカウト章」を受章した上で、ボーイスカウトの「ちかい」と「おきて」の実践に努めたり、野外活動での技能章を5つ程取得したりなど、様々な条件をクリアする必要があります。ベンチャースカウトの期間が3年しかないのもあって、ここまで来る前に諦めてしまうことも多く、得るのが難しい章です。

今回は受章にあたり、首相官邸と文部科学省を表敬し、平成29年度富士スカウト代表として、安倍総理の前で「弥栄（いやさか）」三唱をさせていただきました。非常に緊張しましたが、中々ない機会なのでとても良い経験になりました。

――ボーイスカウトをここまで続けることができたのはなぜですか？

一番の理由は、ビーバースカウトの頃に「世界スカウトジャンボリー」を紹介する映像を見て、「是非これに参加したい！」と思ったからです。世界ジャンボリーは、4年に1度開催されるスカウト最大の大会で、約2週間のキャンプを通じて、世界中のスカウトと交流するイベントです。学校の勉強や部活動もあり、何度も途中で辞めようかと思ったこともありましたが、この大会に参加したいという強い気持ちがあって、続けることができました。

高校2年生の時に、念願がかなって世界ジャンボリーに参加することができ、様々な国の人と活動をし、自分の価値観がすごく変わりました。150以上の国と地域から約3万4000人のスカウトが参加していて、これほどの規模の大会に参加できた事は、本当に貴重な体験でした。

――神戸大学の附属学校に通われていたそうですが、その頃のことを教えてください。

附属小学校に受験をして入学し、その後附属中等教育学校に進学しました。中等教育学校は6年一貫教育で、高校3年生に当たる学年では、「卒業研究」に取り組みました。自分で研究テーマを考えて論文を書くのですが、私はボーイスカウトを題材にして、『幼年期から青年期におけるボーイスカウト運動に関する一考察』というテーマにしました。「楽しく」をモットーに活動してきたスカウト活動でしたが、一つの教育機関として、「子どもたちに意識させずに社会で生きていく力を育む」という目標が定められているなど、研究してみて奥が深いものがあるという事が分かりました。

また、中学生に当たる学年の頃に参加した「トライやる・ウィーク」という、兵庫県で実施されている職場体験も印象に残っています。部活動でサッカーをやっていたこともあり、神戸のスポーツ関連企業に行かせていただきました。サッカースパイクの商品を企画する会議に参加させてもらい、将来自分もこういう仕事がしたいと強く思いました。大学の志望校を決める際にもその思いは変わらず、国際人間科学部の発達コミュニティ学科でスポーツに関することを学べると分かり、神戸大学を受験しました。

六甲全山縦走
（国際人間科学部発達コミュニティ学科アクティブライフプログラムの実習にて）

――キャンパスライフについて教えてください。

今は、主にスポーツ科学やスポーツコミュニティについて学んでいます。「国際」人間科学部なので、日本だけでなく世界に目を向けて勉強ができる大変良い環境だと思っています。この学部では留学が必須になっているので、今年の夏に一ヵ月間ニューヨークへ留学する予定にしています。ニューヨークを選んだのは、アメリカの4大プロスポーツを実際に見て体感したいという事と、アメリカの大学ではどういうスポーツコミュニティが形成されているのかを調べてみたいと思ったからです。

勉強以外では、体育会のフットサル部に所属しており、毎日忙しいですが、とても充実しています。

――これからの目標を教えてください。

大学生の間は、学内外を問わず様々な活動に参加して、自分の価値観や考え方を広げていきたいと考えています。附属中等教育学校の先生が教えてくれた言葉に、「得意より好きを追求しなさい」というのがありました。これまで、スカウト活動や職業体験で自分が興味を持ったことを追求してきたので、これからもその気持ちを大切にしていきたいと思っています。スカウト活動も、今は後輩を指導する立場になり、自分が今までに学んだことを、後輩に伝えていきたいです。

――最後に高校生の方に向けてメッセージをお願いします。

勉強も忙しいと思いますが、それだけに縛られるのではなく、部活動や学校外の活動にも参加して、考え方や価値観を広げてほしいです。その中で自分が興味のあることを見つけて、継続していくことを大切にしてもらえたらと思います。

■インタビュアー学生広報チーム
前田 真我 MAEDA Shinga
経済学部経済学科 3年

世界で活躍するための数理・データサイエンスを学ぶ

神戸大学数理・データサイエンス標準カリキュラムコース　**Center for Mathematical and Data Sciences**

データサイエンスとは、様々なビッグデータを分析し、そこから新しい知見や価値を生み出していく手法・技術のこと。ＩＣＴ技術が急速に発展する現代においては、文系・理系を問わず、これらの知識を持つことがますます重要になっています。神戸大学では、平成30年４月から新たに「数理・データサイエンス標準カリキュラムコース」を開設しました。

数理・データサイエンスセンター長
大学院理学研究科 数学専攻 理学博士
齋藤 政彦 *SAITO Masahiko*

今、第４次産業革命は、「情報化産業革命」であるということが言われています。株式時価総額世界ランキングのトップ５社が、アップルやアマゾン、マイクロソフト等のＩＴ関連企業で占められており、二十数年前と比べて産業構造が大きく変化しました。21世紀の資源は「データ」であり、それを分析・解析して価値に結びつけられる人材を育成することが、重要な課題となっています。

そんな中、神戸大学では、数理・データサイエンスの教育・研究・産学社会連携を推進するため、２０１７年12月に数理・データサイエンスセンター（以下、センター）を設置しました。そして、全学的に教育を実施していこうと、主に学部の１、２年生を対象とした「数理・データサイエンス標準カリキュラムコース」を今年の４月から開講しています。現在は国際人間科学部、経済学部、経営学部、理学部、工学部、農学部、海事科学部の７学部の学生が受講でき、来年度からは残りの３学部でも受講可能になる予定です。

このコースでは、数理科目、統計科目、情報科目、データサイエンス科目の４つの区分を設けており、そこから合計14単位以上取得する事によって、コース修了の認定書が付与されます。理系・文系に限らず、データサイエンスに必要な、数理統計の力、プログラミングの力、価値創造に結びつける力の基礎を学べる内容となっています。

理工系で、こういった分野に興味のある方はもちろんなのですが、人文系・社会科学系や医学系の学生にも多く受講して欲しいと思っています。そのため、第３クォーターから開講する「データサイエンス入門」という授業では、様々な分野でデータサイエンスが使われている実例を知ってもらうため、オムニバス形式での講義を予定しています。医学部でレントゲンやＣＴの画像データを人工知能に教えて画像診断プログラムを作成している先生や、ビッグデータを使って言語学の分野で研究をされている先生、経営学の分野で金融工学、ビットコイン、仮想通貨などの研究をされている先生など、多様な例がありますので、幅広い分野の事例を紹介できればと思っています。

こういった概論的な授業は全学部で共通となるのですが、他の科目ではそれぞれの学部に合わせた授業が行われています。例えばこれはほんの一例ですが、統計科目だと工学部向けの「データ解析」、経済学部向けの「経済統計学」、農学部向けの「食料情報学」があったり、情報科目で国際人間科学部向けに「ＩＴコミュニケーションデザイン」の授業があったりなどです。

また、センターでは今、ＰＢＬ（Problem Based Learning、問題解決学習）という教育方法に力を入れています。これは、実際の具体的な問題を素材として、その解決に向けてチーム学習を行っていくというものです。以前に、日本総研と神戸大学の協働教育ということで、「ＩＴと金融ビジネスの最前線」というオープンイノベーションワークショップを開催しました。その時には、経済学部、経営学部、工学部、理学部などの学生が集まって、実際の金融の現場においてＩＴがどのように使われているのかを学び、現場の問題の解決に向けてグループで議論を行い、その内容を発表しました。神戸大学は10の学部と15の研究科がある「文理融合」の総合大学です。様々な学部・研究科の学生が共に課題に取り組むというのは、まさに本学にふさわしい教育の形です。数理・データサイエンスというのは、その共通する良いトピックだと思います。

このような教育を進めていくにあたり、企業や地方自治体と協働することも欠かせません。企業や自治体には、様々な分野・問題に関して実際のデータが大量にあります。それらを提供してもらって、センターで研究を行い、教育の場にも生かしていく。そういう体制を作っていこうとしています。関西の６大学が連携して「関西地区コンソーシアム」を作っていて、そこへ企業や自治体などにも参加してもらい、人材育成と産業の活性化を目指しています。また、本学はシンガポールの南洋理工大学と協定を結んでいます。南洋理工大学は、コンピュータ・サイエンスの分野では世界２位の大学です。こういった非常に研究力の高い大学とも、お互いの大学でワークショップを開催するなど、連携を密にしています。

ここでは紹介しきれませんが、センターでは、学部生向けの基礎的な教育だけでなく、そこから本当に活躍できるデータサイエンティストを育成するための教育も行っていく予定です。標準カリキュラムコースでデータサイエンスの基礎を学んだ学生が、さらに上のスキルを身につけていける体制も整えていく予定ですので、是非たくさんの学生に活用して欲しいと思います。

センターでは、CMDS論文セミナーをはじめとし、CMDS先端セミナーなど様々な活動を行っています。詳細については、下記のホームページをご参照ください。
http://www.cmds.kobe-u.ac.jp/

神戸大学 CMDS 論文セミナーの様子

関連授業 履修生の声

Voice

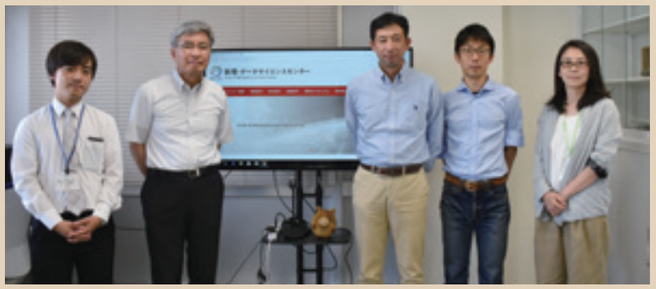
岡部 桃子 *OKABE Momoko*
農学部 資源生命科学科 4年

農学部で開講されていた統計学の授業を取ったことがあったのですが、それで初めて、自分が今まで実験で使っていた統計的な処理手法の意味がよく分かりました。これまで、そういった手法をなんとなく使っていた部分があったのですが、強引なやり方をしていたなと気づきました。それで、今後データ処理をやるのであれば、その基礎の部分をもっときちんと勉強しないといけないと思い、データサイエンスの授業を履修することにしました。

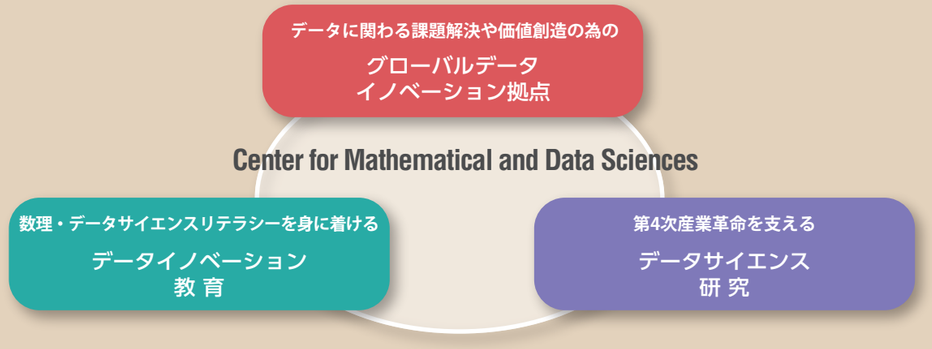
私が受けたのは「データサイエンス概論」という授業だったのですが、確率統計の基礎や、様々なデータ分析手法の基礎、機械学習の原理などを学びました。いろんな手法の基礎を学ぶことができ、「この場合はあの手法が使えるんじゃないか」と発想できるようになったのも良かったです。

私は今、ロシアの森林のデータを解析して、山火事の起きた時期によって森林がどのように変化していくかというのを研究しています。200年前・40年前・2年前に山火事が起きた土地のデータを比較したりするのですが、こういった数字として結果が見えるような研究が好きなので、今後もデータサイエンス関連の勉強をし、活用していきたいと思っています。

センターの研究の一例：高齢者のリハビリや運動能力の評価のため、姿勢や重心制御の能力を測定。



数理・データサイエンスセンタースタッフ：左から、井上 広明特命助教、齋藤 政彦センター長、小澤 誠一研究部門長（副センター長）、爲井 智也特命講師、中山 晶絵学術研究員



キラリ 神大OG・OB

日本の魅力を新しい手法で海外へ発信

フォロワー数40万人超えのFacebookページ「Japanese Language & Culture」。海外で様々な経験をし、現在このFacebookページを使って神戸から世界へ情報を発信するビジネスを展開されている、株式会社Travel & Workの代表・金子かずえさんにお話を伺いました。

■インタビュアー学生広報チーム
下村 明日香 *SHIMOMURA Asuka*
経営学部経営学科 3年

大阪産業創造館でのインバウンドイベント出展

南洋理工大学で担当した日本語クラスの学生と

――現在、どのようなお仕事をされているのですか？

「Japanese Language & Culture」というFacebookページを運営していて、そこに飲食店や自治体の観光PR等を投稿するというビジネスをしています。このページは、主に日本語や日本文化を紹介する写真・動画を、ほぼ毎日投稿しているものです。動画には私自身も出演し、関西の観光地のレポートをしたり、「Kanji on the street」と題して日本でよく見る漢字の解説をすることもあります。これらのコンテンツは海外の方にとても人気があって、ページには今、20～30代を中心に40万人以上のフォロワーがいます。

このページを利用すれば、インバウンド向けのPRを、日本に関心を持っている外国人の方に的確に届けることができます。より効果的なPR動画を提案・作成するのも、弊社のサービスの一つです。学生の頃から海外に興味があって、これまで10年以上海外で生活していましたので、その経験を生かして事業を行っています。

――学生時代から海外に興味があったのですね。その頃のお話を聞かせてください。

私は埼玉県出身で、神戸に来たのは大学進学の時が初めてでした。神戸は海も山も近く、自然と都会が程よくあって、「すごい！」と思いましたね。理学部生物学科で学んでいて、当初は研究者になろうと考えていました。演劇研究会の「はちの巣座」にも所属していて、勉強に課外活動にと、とても楽しい大学生活でした。そんな中、2年生が終了した頃に、世界を見て視野を広げたいと思うようになったんです。それで、休学してアメリカに1年間留学し、カンザス州、ミシシッピ州、ミネソタ州を回って英語と専門分野を勉強しました。

金子 かずえ *KANEKO Kazue*
株式会社 Travel & Work 代表取締役

埼玉出身、1998年、理学部卒。Univ. of New South Wales 日本語応用言語学科修士号取得、海外滞在歴10年（アメリカ、オーストラリア、シンガポール）、日本語講師、ビジネス開発マネージャーを経て2006年にシンガポールにてJ-Biz Training & Consultancy 設立、企業向け日本語教育及び日本ビジネス文化セミナーを提供・主催。シンガポール及びマレーシアの大学関連施設、ホテル（公開講座）等で開催、2008年日本語・日本文化情報を発信するFBページ: Japanese Language & Culture 運営開始、2010年帰国後、様々な企業にてトレーナーの仕事を務める。前職はアマゾンジャパン、2017年日本発信メディア広告サービスを事業とするTravel & Work を設立。

株式会社 Travel & Work 代表取締役 金子 かずえ

――卒業後はどのような進路に進まれたのですか？

一旦は大学の研究室に研究生として所属したのですが、もう一度アメリカに行きたいという思いが強くて。色々と探して、アメリカの大学で勉強をしながら、そこで日本語を教えるという留学プログラムを見つけて応募しました。それでフィラデルフィアの大学で日本語教授法を学んだ後、テネシー州の大学で2年間日本語のクラスを受け持ちました。日本語を教えるのはとても面白かったです。この時に、自分は人前で何かを教えるのが好きなのだと発見しました。

その後は、シドニーの大学院に進学し、日本語と英語の教授法を学び、また実際に日本語のクラスを受け持ちました。日本語を学びたいという人は意外と多く、学習者には様々な母国語の人がいて、それぞれに合った教え方を考え、提案するのが楽しかったです。

――シンガポールでも長く生活されていたとか。

そうですね、シドニーの大学院を卒業した後、シンガポールに移住しました。たまたま仕事を見つけられたからだったのですが、あっという間に7年も経ってしまいましたね。

実は、最初に起業したのはシンガポールだったんです。当初は企業に勤めていたのですが、シンガポールは副業をしている人も多く、気軽に起業できる環境が整っていたため、自分でもできるのではないかと思って。それで、企業向けの日本語教育を提供する会社を立ち上げました。最初は日本語のみを教えていたのですが、あるお客様のリクエストにより、日本ビジネス文化セミナーを開催することになって。これが意外と需要があったので、企業や公開講座、大学の生涯学習コースなどでも実施させていただきました。また同時期に南洋理工大学で非常勤の日本語講師もしていました。この時の経験は、学ぶことがたくさんありましたね。

――海外で多彩な経験をされていたのですね！ 日本に戻って起業された経緯を教えてください。

シンガポールでは永住権も取得していたのですが、改めて「ああ、日本は良かったな」と思うようになりました。それに、日本語や日本文化を教えていながら、日本にもう10年も帰っていないというのもダメだなと（笑）。それで、リフレッシュしようと思って帰国しました。日本での起業は難しいのではという先入観があって、一旦は企業に就職しました。

日本で起業することになったきっかけは、「Japanese Language & Culture」のフォロワー数が徐々に増えていき、ページに広告を出させてくれないかと問い合わせをいただいたことです。このページは、シンガポールで起業した会社のPRの一環として作ったものだったのですが、日本に帰ってからも時々更新していました。これがビジネスになるのではと感じ、去年の6月から事業を始めて、今年の5月に法人化したところです。企業で働くのも楽しかったのですが、どうしても大好きな神戸に戻りたくて。神戸でなかなか就職先を見つけられなかったので、神戸で起業すれば戻れるじゃないかと思ったのも大きいです。

――今後のことについて教えてください。

飲食店や、イベント・観光地をPRしたい自治体の方に、もっと利用してもらえるよう活動していけたらと思っています。「Japanese Language & Culture」は日本に興味のある外国人の方がたくさん見てくれていますし、そこから更に特定の分野でターゲットを絞り、費用対効果の高いPRができます。ぜひ弊社のサービスを利用して、外国人誘致のきっかけにしてもらいたいです。

また今後は、会員制のサービスなどを作って、日本語教育プログラムをしたり、ニッチな情報の発信もしてみたいなと思っています。アイデアは色々尽きないので、どれを事業としてやるか選ぶのが難しいですが、自分が思い描いたことをこれからも実現させていきたいです。

――最後に神大生に向けてメッセージをお願いします。

やりたいと感じたことをするのは、とても価値のあることだと思うので、是非何でも挑戦してほしいです。留学も、今は大学が手厚くサポートしてくれるので、挑戦するハードルはすごく下がっていると思います。私が通っていた頃は今ほど整ってなかったので、羨ましいです（笑）。やってみて損をするということは、ないと思います。きっと得られるものの方が多いので、是非やりたいことをやってみてください。

株式会社Travel & Work https://travelandwork.jp

社会課題の解決にピンポイントで取り組み 志高いリーダーを育成する！

国際的な学生インターンシップを、学生自らの手で企画・運営しているアイセック神戸大学委員会。その活動が今年から、神戸大学の「神戸グローバルチャレンジプログラム（GCP）」と連携することになり、アイセックの研修プログラムに基づく海外インターンシップが単位認定の対象になった。アイセックを通じて海外に目を向ける学生が、さらに増えそうだ。

インドの海外インターンにて。春の訪れを祝い、色のついた水や粉をかけ合うヒンドゥー教の「ホーリー祭」に参加

アイセック神戸大学委員会メンバー

カンボジアの海外インターンにて、現地の子どもたちと

人材育成

柳林 康 *YANAGIBAYASHI Kou*
発達科学部 人間環境学科 3年

── 主な活動内容は？

井関　日本の学生を海外の企業やNPO法人にインターンとして派遣する「送り出し事業」と、海外の学生を日本の企業に派遣する「受け入れ事業」の2本柱です。研修プログラムの企画から、受け入れ企業への提案、学生の募集やビザなどの就労手続き、参加する学生のフォローまでを行っています。

柳林　海外への送り出しは126か国・地域の支部と連携していて、現地（海外）企業への提案をしてもらっています。人を介すると、自分たちが考える趣旨が伝わりにくい時もあるので、直接現地を訪れて交渉することもあります。僕も先日、タイに出張し、提案をしてきました。インターンの期間は、送り出しは主に春・夏休みに約1ヵ月半。受け入れについては1ヵ月から長いものでは半年の期間と幅があります。

── 活動指針などはありますか？

井関　僕たちは、アイセックの「平和で人々の可能性が最大限発揮される社会の実現」というビジョンのもと活動しています。海外インターンシップを通し、異文化圏の人と、同じ目標に向けて協力して活動するという経験をしてもらう。それにより、様々な国の人々と社会課題の解決に向けて協働できる、高い志をもったリーダーを輩出することを目指しています。

柳林　アイセックでは、特に目標設定を大事にしています。人は、簡単に達成できる範囲のことだけをやっていても成長しません。海外インターンシップを企画する上では、社会課題の解決を目指したり、一人で活動するだけでは実現できない目標を設定したりすることで、自分の壁を乗り越えて、人を巻き込む力や挑戦していく力を養ってもらえるようサポートしています。

── 受け入れ先の企業側のメリットは？

井関　今まではCSR活動の一環として、会社のイメージアップを挙げていましたが、それだけでは企業側のメリットとして弱かったので、今では国外進出のきっかけになることを伝えています。たとえば企業が展開するサービスや商品が、国外に響くかどうかはなかなか分かりません。そこで、国外の学生を受け入れ、協力して国外の情報をマーケティングすることで、国外展開のヒントになると考えています。

柳林　受け入れ事業についていえば、優秀な人材の確保もメリットになります。ITや語学スキルの高い優秀な人材を採用することで日本の企業が抱える課題の解決につなげていただけます。

アイセック（AIESEC）とは

オランダ・ロッテルダムに本部を置く国際的非営利組織で、126の国と地域に7万人以上の会員を有する世界最大級の学生団体。
「自国の社会や人々の発展と成長に貢献しうる、志とリーダーシップを有する人材を世に送りだすこと」を活動方針とし、学生インターンシップによる海外研修生交換事業（研修生の送り出しと受け入れ）を世界規模で展開。基本的に全て学生が運営し、様々な国々のアイセック間で学生の交換が行われる。日本ではNPO法人アイセック・ジャパンが活動している。

委員会代表

井関 亮太 *ISEKI Ryota*
経済学部 経済学科 3年

井関　海外の学生ならではの新しい視点に期待してくださる企業も多いですよ。

── 活動する上での課題は？

柳林　他の海外インターンシップとの差別化と、そのアピールによってプログラムへの参加者を増やすことです。

井関　一昨年ごろから、独自プログラムを企画しています。一つ目が「アグリノ」という持続可能な農業を実現するためのプログラム。海外で現地の方とともに、有機農業などの環境に負荷をかけない農業に取り組みます。昨年の12月からホームページやSNSで情報を発信したところ、10名の定員に対して全国から申し込みが25名も集まりました。

柳林　二つ目は移民問題に取り組む「ネスト」。シンガポールやインドの移民の方がより良く働くために必要なスキルの指導、移民同士の交流イベントの開催などを行います。昨年12月に神戸で多文化共生について話し合うワークショップをP&Gと共催したところ、50名近くの参加者があり、ネストへの申し込みにつなげていきました。

井関　「Eduvation」というプログラムでは、子どもの教育問題に取り組んでいます。今、教育現場では、子どもたちに英語やITのスキルを身に着けさせる教育が求められています。そこでこのプログラムは、将来教育関連の職業に就くことを考えている学生に、IT・グローバル教育の先進国であるシンガポールで最先端の教育を体感してもらう内容になっています。国内のIT教育に力を入れている小学校とも提携しており、帰国後はその学校の先生に学んだ内容を報告し、日本の現場からの意見をもらうことで、学びをさらに深めることができるようになっています。

柳林　そのほか、日本での震災の経験をもとに海外に防災教育をするプログラム「そなえ」や、女性の起業を支援するプログラムも進行中です。

── 今後の目標は？

井関　これまでは「海外に行ってみたい」というだけで海外インターンシップに参加する学生もいて、学生の目的と企画の趣旨にズレを感じることもありました。目的を明確にした独自のプログラムをさらにブラッシュアップして、趣旨に賛同する参加者をもっと増やしたいです。

柳林　先日神戸大のGCPとの連携が決まり、企画したプログラムの一部が学生企画型のインターンシップとして単位認定されることになりました。アイセックの認知度が上がって、多くの学生に海外での成長の機会を得てもらう良いチャンスだと思うので、さらに魅力的なプログラムを発信していきたいです。

Message from a foreign student

こんにちは！留学生です

異国の地で「越境文学」を研究する

Q 神戸大学に来る前はどういうことを？

ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)で日本学を学んでいました。そこで募集していた「日本語・日本文化研修留学生プログラム」に参加し、2013年に初めて神戸大学に来て、１年間勉強しました。その後、SOASで学士を取得し、2016年に神戸大学人文学研究科の博士課程に進学しました。

Q 神戸大学に来ようと思った理由は？

最初のプログラムで神戸大学に来たのは、たまたま募集があったからで、幸運な偶然でした。SOAS卒業後、神戸大学の大学院で勉強を続けようと思ったのは、先生方や大学院生に、私の研究テーマである「越境」という、最も現代的な文学の問題に関心を持っている人たちがいたからというのと、何より神戸という場所自体にも惹かれるところがあったからです。神戸は六甲山があり、自然が豊かです。また、異人館など、百数十年前にドイツ人やイギリス人がこの地で暮らした建物の跡を目にすることもでき、歴史の流れを感じられるというのも魅力です。

Q 今はどのようなことを研究していますか？

リービ英雄という、日本語を母語とせずに日本語で小説を書いているアメリカ出身の作家を中心に、現代文学における「越境」と呼ばれる現象について研究しています。

今はグローバリゼーションの時代で、世界中どこでも自由に動ける世の中だと思われています。リービ英雄のような作家たちは、グローバル化を体現しているかのように見えますが、それに非常に敏感な対応をしています。いくらグローバル化が進んだとはいえ、自分の母語ではない言語で小説を書くというのは、当たり前のことにはなりません。文化の境界線のようなものを越えていこうとする意志──越えたいと思う意欲が、何によって生じるのか。彼らのような作家が、文化や文学の求心力のようなものと、どのように向き合っているのか。そういったことを、もう少し丁寧に見ていく必要があるのではと思っています。

イギリス出身の私が日本でそういった研究をしているのも、「越境」の側面がありますね。今年の５月に、院生主体の研究グループで、SOASの教授を招いてワークショップを開催しました。そこで私も自分の研究内容を発表したのですが、今研究していることや自分の状況について、改めて考える良い機会になったと思います。

トーマス・ブルック
Thomas Brook

人文学研究科 博士課程後期課程 1年
イギリスのウェスト・ヨークシャー州出身。日本学術振興会特別研究員。大学院生主体の研究会「他者をめぐる人文学研究会」に所属。自然豊かな場所が好きで、料理や家庭菜園も嗜む。

イギリス ウェスト・ヨークシャー は、イングランドのヨークシャーにある都市州。1972年の地方行政法に基づき、1974年に成立した。人口はおよそ210万人。

イギリス・ダービーシャーの風景

ワークショップでの発表の様子

趣味の家庭菜園

イギリスの伝統料理・ローストビーフ

世界各国から来た約1300人の留学生が神戸大学で学んでいます。
このコーナーでは、母国の文化や習慣などの話を交えながら、国境を越えて頑張っている留学生にスポットを当てます。

International NEWS ―国際ニュース―

2018年5月1日現在、神戸大学は、63か国・地域にある351の大学・研究機関と学術交流協定を締結し、国際交流活動を推進しています。
神戸大学国際連携推進機構 http://www.office.kobe-u.ac.jp/ipiep/

神戸大学の新しい海外拠点を設置しました

神戸大学は、2018年5月17日に、ルーマニア・クルージュ=ナポカに神戸大学／バベシュ・ボヨイ大学国際協力センターを第7番目の海外拠点として開所しました。バベシュ・ボヨイ大学は、1998年の学術交流協定締結以来、欧州の教育プログラムであるErasmus+に参画するなど継続的に活発な交流が行われてきた協定校の一つであり、本学の同窓生も研究者として複数在籍しています。活発な学生・教員の交流と、共同研究の推進のため、今回拠点を開設することとなりました。欧州では、ブリュッセルオフィス、ポーランド拠点（クラクフ）に続く第3番目の拠点であり、他の2拠点とともに欧州における本学のプレゼンス向上のため、活発な交流活動を企画していきます。

また、6月23日には、中国・上海に神戸大学・上海交通大学文理融合国際共同研究拠点を開所しました。上海交通大学は、2009年に学術交流協定を締結して以来、全学において留学生の相互派遣を実施してきました。今後は、拠点を活用し、中国有数の総合大学である同大学とともに、本学の社会科学分野・理系分野双方に強みを有する伝統と特色を生かし、本学のビジョンとして掲げられている先端研究・文理融合研究を推進していきます。また、日本留学への関心が高く、もっとも多くの学生を受入れている中国の3番目の拠点として、日中両国の将来を担う人材育成を目指します。

両拠点とも神戸大学国際連携推進機構内にも拠点が設置され、バベシュ・ボヨイ大学と上海交通大学の拠点として、日本国内における国際交流活動を実施することで、双方向の交流の拡大が期待されています。

■神戸大学／バベシュ・ボヨイ大学国際協力センター

■神戸大学／上海交通大学文理融合国際共同研究拠点

留学だより

オーストラリアでの留学経験

国際文化学部国際文化学科 4年　木全 陽菜
KINATA Haruna

私は、約1年間オーストラリアのクイーンズランド大学に交換留学しました。高校生の頃から英語圏へ留学したいと考えていましたが、この留学先に決めた理由は、白豪主義から多文化主義へ変化したオーストラリアの移民政策に興味を持ったからです。

大学では主に、オーストラリアの移民の歴史について学びました。授業を理解するのに苦労することもありましたが、全ての講義が録音されており、チューターに課題の添削をしていただける機会があったため、積極的に利用していました。学業以外では、様々な人種や年齢の方と交流したいと思って、寮のイベントや学外のボランティアに参加しました。寮のイベントには、大学内の寮対抗の合唱大会やダンス大会があり、それらに参加することで多くの友人をつくることができました。また、オーストラリアはボランティアが盛んなため、マラソン大会や日本語教室のボランティアなど、様々なものに挑戦することができました。初めは不安もありましたが、ボランティアに参加するうちに、一人で新しい環境にとびこみ信頼関係を築く自信をつけることができました。

私は留学を通して様々な方と交流し、語学力だけではない多くのものを得ることができたと感じています。だからこそ、留学を迷っている方にはぜひ挑戦してみてほしいと思います。

合唱大会にて（左から２番目が本人）

クイーンズランド大学

Mini News

実証実験開始！　～「さんちか」から神戸のスマート化～

神戸大学では、神戸市の中心部・三宮地下街「さんちか」にて、IoTやAIを用いて利用者の行動を把握・予測し、気流制御で冷暖房消費を大幅に削減する実証研究を進めており、今年の夏に実証運転を開始いたします。

本実証では、空間を均一に空調するのではなく、人がいる場所に快適な風を運ぶことで、空調消費電力及びCO_2排出量を、約50%削減することを目指します。今年3月開催の全国地下街連合会において先進的取組みとして紹介されました。

また、本事業で得られるビッグデータは、今後、神戸市の新たな市民サービスの創出に活用することができることから神戸市も参画しています。再開発が進む三宮の要所に位置する「さんちか」での本事業を機に、神戸都心のスマート化を推進していきます。

※本事業は、環境省「CO_2排出削減対策強化誘導型技術開発・実証事業」の採択を受け日建設計総合研究所、創発システム研究所、神戸地下街と共同で実施しております。

前列左から、長廣 剛 / SSC推進室特定プロジェクト研究員、玉置 久 / システム情報学研究科長、竹林 英樹 / 工学研究科准教授、磯崎 日出雄 / SSC推進室特定プロジェクト研究員

「志（こころざし）」特別入試を導入します

神戸大学では平成31年度の入試より、「志」特別入試を導入します。これは、11月下旬に合否が決まる、センター試験を課さないAO入試です。

それぞれの分野のリーダーとなって、21世紀の人類社会に大いに貢献したいという高い「志」をもつ学生を見出すため、今日の入試改革の理念をふまえた新しい選抜方法を採用します。第一次選抜では志望理由や高等学校時代の様々な活動の経歴に加え、本学で学ぶために必要な基礎的学力に対する評価を行います。最終選抜では、目指す学部・学科等において、それぞれに特化した適性を見極め、専門分野にかかわる学力を有しているか総合的に評価します。全ての受験生に面接を課し、書面のみでは測れない学力を評価することを重視します。

ホームページで募集要項をご覧ください。

JR元町駅前の待ち合わせスポットを神戸大生がデザインしました

2018年4月、神戸市のJR元町駅東口前に、新たな待ち合わせスポット「元町泊（もとまちのとまり）」が完成しました。神戸市が整備デザインを一般公募し、47件の応募の中から神戸大生グループの案が最優秀賞に選ばれ、「六甲の稜線」と「みなとの泊（とまり）」を模した階段状のベンチが設置されました。グループの工学研究科建築学専攻遠藤秀平研究室の山本修大さん、塚越仁貴さんらは、「愛着をもってもらえるよう、神戸にちなんだ個性的なデザインを考えました。待ち合わせや談笑のための場所として定着していってほしいです」と思いを語りました。

読者の皆様へアンケートのお願い

神戸大学広報誌『風』11号をお読みになっての感想をお聞かせください。今後の誌面作りの参考にさせていただきます。

1.どの記事に関心を持たれましたか　2.その記事についてどのような感想を持たれましたか　3.今後読みたい記事　4.その他何でもご感想を

アンケートの回答は神戸大学広報課のメールアドレスにお願いします。　ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp　※ご職業、年齢を書き添えていただけると幸いです。

WEBフォームもありますので今すぐアクセス！

日々情報更新中！　神戸大学公式 Twitter「@KobeU_PR」　神戸大学公式 Facebook「神戸大学 _ Kobe University」　「フォロー」「いいね！」お願いします。

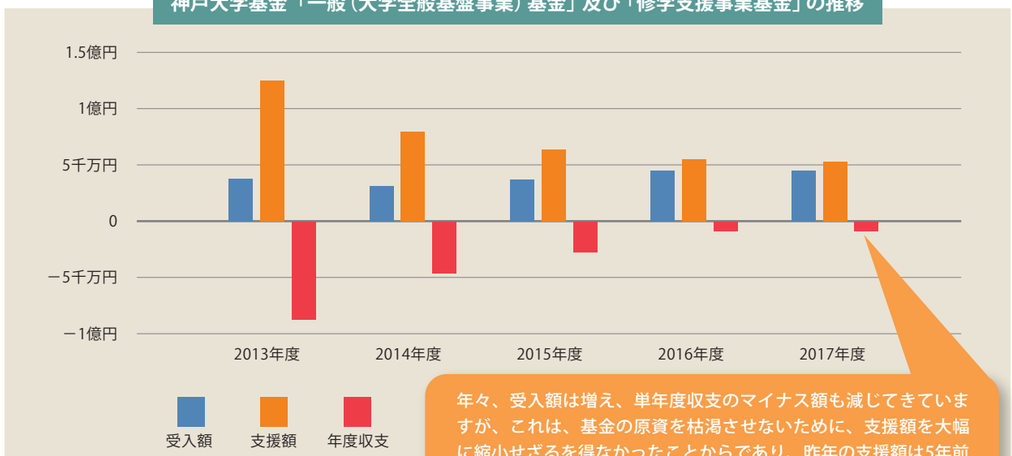
神戸大学基金だより

神戸大学基金では、学生への支援を中心に、様々な分野へのサポートを継続的に行っています。
しかし、その原資となる寄附残高が年々減少していることから、支援を必要とする学生は多数いるにもかかわらず、その全てに対応することができず、ここ数年は支援額を縮小している状況です。

支援額をこれ以上縮小することを避け、また、継続的なサポートを拡充するために皆様のご協力をいただきたく、神戸大学基金へのご寄附を何卒よろしくお願い申し上げます。

「一般（大学全般基盤事業）基金」とは、大学全体で行っている事業へのご寄附です。主に、在学生の国際化対応や課外活動支援等を中心とした事業を行っています。
「修学支援事業基金」とは、経済的な理由で修学が困難である学生を支援する事業へのご寄附です。主に、奨学金事業を行っています。
神戸大学基金では、その他用途指定寄附として、部局周年記念事業や特定課外活動団体へのご寄附、企業等からの寄附講座を受入れています。

神戸大学基金「一般（大学全般基盤事業）基金」及び「修学支援事業基金」の推移



年々、受入額は増え、単年度収支のマイナス額も減じてきていますが、これは、基金の原資を枯渇させないために、支援額を大幅に縮小せざるを得なかったことからであり、昨年の支援額は5年前の約4割となっています。

平成30年度の主な支援予定

■国際化対応

- 神戸グローバルチャレンジプログラム、協定校への学部生派遣、ダブルディグリープログラムへの院生派遣への助成
- 優秀な受入留学生への助成

■奨学金

- 緊急奨学金
  災害や不慮の出来事による修学・生活困窮学生への支援として奨学一時金（25万円）の給付
- 奨学金（新１年次対象）
  優秀かつ生活が困窮している新1年次生への支援として年額25万円の奨学金の給付
  ※1年次を対象とする奨学金は少ないことから実施しています。

■課外活動支援

- 東日本大震災ボランティア活動支援
- 大会遠征費等課外活動支援

※神戸大学基金については、ホームページもご参照ください。▶ 神戸大学基金 検索

学生広報チーム＆神大うりぼー・学内探検隊！

学生会館

周辺の木々のおかげで秘密基地のような佇まいの建物ですが、神戸大学の課外活動施設の一つです。主に放課後に賑わいを見せ、廊下やバルコニーまで余すところなく活動に利用されています。

■大ホール
最上階の大ホールでは、曜日・時間帯を決めて、各団体が合奏やダンスの練習などを行っているようです。まさかホールまで備えているとは驚きです。侮り難し、学生会館…！

■自由スペース
学生会館２階の自由スペース。神大生に利用されている他のスペースとの大きな違いは、楽器を演奏している人が多いこと。様々な音楽系団体の練習場所になっていて、いろんな音に包まれている空間です。

出演：経済学部４年・杉岡 祐依、文学部３年・小林 優奈、神大うりぼー

神戸大学

神戸大学が位置する「灘」は、日本一の酒どころ。そんな地元を盛り上げるべく、老舗酒造メーカーと大学が協働する取り組みを特集しました。研究ズームアップでは、河川防災に関する研究をご紹介。本学の知見を、近隣地域から世界まで幅広く還元していく様を取り上げました。（広報課）

発行日／ 2018年7月
編集・発行／神戸大学 総務部広報課
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL.078-803-5083 FAX.078-803-5088
アートディレクション・デザイン／有限会社ティクリエイション
印刷／能登印刷株式会社
©2016 神戸大学
※本誌に掲載されている記事、写真、図表の無断転載を禁じます。